

巻頭言

これからの図書室に期待すること —古きから新しきへの想い—

岡山赤十字病院 副院長
名和 清人

日赤図書館雑誌第15巻「巻頭言」の執筆依頼を受け、改めて己の無知さ加減に驚いた。図書館の起源、歴史や機能を知らずして其の未来は語れない。

図書館の起源は、紀元前7世紀のアッシリア王アッシュールバニパルの宮廷図書館に発し、次いで古代エジプトのヘレニズム王朝が紀元3世紀に建てたアレキサンドリア図書館が歴史的に著名であり、知識・資料の宝庫であったといわれる。当時書籍は極めて希少且つ貴重なものであり、旅人から本を没収して写本を作成するほどの徹底した資料収集方針の下、古代最高の学術の殿堂となり、知識と情報の収集・蓄積・共有・分配の場であったようだ。

図書館とは何か？その機能抜きには理解できないが、機能自体も時代、社会、利用者のニーズと共に変化してきた。今日、「図書館とは、図書、雑誌、視聴覚資料、点字資料、録音資料等のメディアや情報資料を収集、保管し、利用者への提供等を行う施設もしくは機関」とされている（百科事典Wikipedia）。しかし、今や情報の作成・発信の場としてのアクティブな機能を発揮できるものでなければならぬ。

NAWA Sugato

岡山赤十字病院 副院長

snawa@mx32.tiki.ne.jp

こうした情報の記録、保管、伝達に用いられたメディアは、時代と共に著しい変革・変遷を遂げてきた。前述の宮廷図書館の粘土板文書や人の手による写本に始まり、中国木版やグーテンベルグ活版の印刷技術への変革と普及により、一握りの特権階級の宝物であった書物は、多くの一般市民の共有する財産となった。而して、1980年代のコンピューター・情報通信技術の飛躍的発展をみるに至り、農業革命、産業（工業）革命に次ぐ人類第3の革命といわれるIT革命の時代に突入した。今日、電子媒体による情報通信技術の爆発的な普及により、地球規模での情報の配信と共有化が可能となっている。

厚労省もこうした情報化社会における図書館の在り方を検討し、2006年3月、“これからの図書館像”（報告書）を公開している。注目すべきは“これからの図書館サービスに求められる新たな視点”として「紙媒体と電子媒体の組合せによるハイブリッド図書館の整備」を緊急課題に挙げていることである。これにより、レファレンスサービスや課題解決支援機能の充実を図ることができ、また、種々の大規模データベースや横断的検索システム等が活用でき、豊富な情報の提供が可能となるとしている。当院も未だ小規模ながら整備を進めており、2年後の電子カルテ化に便乗し、図書室におけるネット環境が拡充されるものと大いに期待している。

更に、「図書館間の連携・協力」を掲げているが、日本赤十字社事業局医療事業部において、電子ジャーナルを含め、電子医学資料の共同購入についての検討が進められているところである。当院においても其の意向に関するアンケート調査を2回行った。

電子化によるメリットの理解度は高まってはいるものの、ネット環境の不備さの問題は別としても、閲覧者の視力、画面の広さ、通り閲覧の期間や中断後の閲覧不能等の種々の問題が指摘されている。また、偶然目に留まった表紙目次から、望外の知識・情報の恩恵に浴した経験をお持ちの方は少なくないであろう。電子図書室では望むべくもないことである。電子化への変革は、写本から印刷へのそれに匹敵する一大イベントではあるが、手放しでは受け入れられない現状があり、従来の印刷物と電子ジャーナルの両者で購読可能なものに限定する意向が強い。

一方、情報の氾濫があり、それに伴う信憑性、安定性の問題も指摘し、情報リテラシー（さまざまな種類の情報源の中から必要な情

報を検索し、アクセスした情報を正しく評価し、活用する能力）教育の必要性を指摘しており、IT社会における図書室司書のスキル、労働環境、処遇の問題にも言及している。病院図書室公開や患者図書室などの構想と平行して改善されなければならない。

新しきへの想いは尽きないが、薄明かりの中、鈍く深い輝きを放つ磨き上げられた木製の書棚、その分厚いガラス戸奥に整然と取められた重厚な装丁の書籍、靴音を立てることもはばかられ、鉛筆の転がる音さえ響き渡る静寂、微かに聞こえるBGMのゆっくり流れる安らぎの空間、其の中にあって深々と腰を沈め瞑想にふける自分の姿を、想い描いたのは私一人だけであろうか。年を重ねた者のノスタルジアか。EBM至上主義とも云われる今日、氾濫する情報と多忙な時に押し流されんとする医療従事者に必要なもの、それは安らぎと瞑想の空間であり、それを提供できるもの、それが図書室であって欲しいのである。

安らぎと瞑想なき処、ノイエスなし！